



湯河原ロータリークラブ WEEKLY REPORT



2020年9月4日(金)
例会 第2812回

天気：晴れ 合唱：君が代
それこそロータリー 四つのテスト

ロータリーは機会の扉を開く

会長 山本明峰
幹事 佐藤友彦

事務所：神奈川県足柄下郡湯河原町宮上 566 湯河原温泉観光協会内
TEL 0465(64)1234 FAX 0465(63)1716
例会場：ニューウェルシティ湯河原 静岡県熱海市泉 107
TEL 0465(63)3721 FAX 0465(63)6401
例会日：毎週金曜日 12:30~13:30

会長挨拶

大分日にちが経ってしまったのですが、7月号の町の広報に、私が現在住持する城願寺のことが裏面一面に取り上げられておりましたので、今日は是非そのことを紹介させて頂きたいと思っております。記事のメインになるのは境内の三十三観音像のことで、建立されたのは明治維新の10年前の安政5年。この年全国各地でコレラが大流行、発症して3日でコロリと死んでしまうことから、「三日虎狼痢」と恐れられたと伝えられています。観音像は線彫の石像で、コレラ封じを願って急遽造られたとされます。観音像の寄進者の中心になって発願の運動をされたのが、当クラブの常盤会員の祖先に当られる方で、他に数十名の方々の賛同を得て建てられたものです。この時のコレラの発生源とされたのが、黒船のペリー艦隊のうちの一隻、ミシシッピ号の乗組員とされ、上陸した長崎からたちまち東漸し、全国の死者は数十万人に上ったと推計されています。幸い当時の湯河原の村々では、この観音像を作り、人々が祈りを捧げたことで大きな流行にはならなかったとの逸話が残っております。

幹事報告

国際ロータリー日本事務局より

- 9月のロータリーレート 1ドル106円
- 会員増強・新クラブ結成推進月間 リソースのご案内 ガバナーより
 - 第49回ロータリー研究会 第2部オープン・フォーラム開催について

出席報告	ゲスト 0名 ビジター 4名	会員 25名
	欠席 3名(免除者3名)	前回の修正出席率 90.91%
	出席率 100.00%	前々回の修正出席率 82.61%

事前メイクアップ 0名

ビジター 中村辰雄君(相模原南ロータリークラブ)
根岸君代君(平塚北ロータリークラブ)
関口直美君(平塚湘南ロータリークラブ)
小野良太郎君(秦野中ロータリークラブ)

今回の第49回ロータリー研究会は、Zoomのウェビナーによるオンラインの形での開催となりました。第2部ではドイツのクナークRI会長とライブで繋げ、オープン・フォーラムを行います。つきましては、今回新たに第2部からロータリークラブ会長とローターアクトクラブ会長にもご参加いただけますので、ぜひご参加賜りますようご案内申し上げます。返信期限：10月6日(金)
連絡事項 なし

スマイルBOX

9/1~10

会員誕生日 深澤昌光君(9/1)
入会記念日 石田浩二君(9年・H23.9.2)
入会記念日 神谷一博君(14年・H18.9.8)
中村辰雄君(相模原南ロータリークラブ)
本日は、インドデリーポリオ経口投与活動の仲間たちとメークに参りました。よろしくお願ひ致します。
根岸君代君(平塚北ロータリークラブ)
初めて湯河原RCのメイキャップにおじゃまさせて頂きます。よろしくお願ひいたします。
関口直美君(平塚湘南ロータリークラブ)
インドのポリオでお世話になった神谷さんに会いにまいりました。よろしくお願ひ致します。
小野良太郎君(秦野中ロータリークラブ)
本日はお世話になります。
神谷一博君
本日は、インドポリオチームの方々(中村さん、小野さん、根岸さん、関口さん)湯河原ロータリークラブへようこそ、アフリカのポリオはやっと根絶宣言されました。あと2カ国がんばっていきましょう。
小倉高代君
先日はゆがわら中央高等学院の学生がお邪魔させて頂き有難うございました。ジャージを寄付して下さいました神谷さんと石田さん。本当に有難うございました。子供たちも大変喜んでおります。

特別授業の一環なので、単位に充当します。高校時代に子供たちが社会の方に触れ合う機会は少ないので、ロータリークラブの色々な職業の社長さんたちに触れ合えてありがたいです。今後とも宜しくお願いします。

櫻井武志君

本日、今季初の出席率100%です。皆様ありがとうございます。

【訃報】石倉幸久会員

去る8月30日、当RC石倉幸久会員が、享年67歳を以て薬石効なく逝去されました。石倉会員には2009年度の入会以来、2017年度の会長をはじめ、幹事や理事などを歴任されるなど、本RCの発展に多大なる貢献を賜りました。慎んで哀悼の意を表します。

卓話: 安江 仁孝君

土屋会員代講

「コロナ禍」について

1. 新型コロナウイルスのNow!!

昨今のコロナ禍でのストレスのひとつに「情報リテラシー」があります。錯綜する情報を分別する要点として、情報が誰から発信されたかの認識が重要です。今回の卓話では、専門家がコロナ禍の現状を網羅的に説明した良質な資料として、武藤義和先生（公立陶生病院）ご発表の「新型コロナウイルスのNow!!」について紹介します。具体的な内容は武藤先生のフェイスブックページをご確認ください。内容を受けての素朴な私見としては、新型コロナウイルスが恐れられているのは（症状もさることながら）未知の病原体であること、加えて現状は予防（ワクチン）、診断、治療（特効薬）のいずれも決め手を欠く状態となっていることにあると考えられます。言い換えれば研究の進展によってそのどれかでも決定的な手法が登場すれば、現状のような深刻な「コロナ禍」は峠を越すようにも思われます。案外、夜明けは近いのかもしれませんが。しかし近年の新型コロナウイルスの発生ペースから推測するに、次の「新型ウイルス禍」は遠くない将来に現出すると考えなければいけません。「With ウイルス時代」と形容すべきこれからの時代、私達はどうか立ち向かうべきでしょうか。

2. With ウイルス時代を想定する

具体的な立ち向かい方としては、単純に「平時（流行していない）でも有事（流行時）を想定しながら過ごす」形が考えられます。天災などに備えるように、ウイルス禍にも備えるべきという視点です。しかし有事対応で平時の生活に制約が生じ過ぎては窮屈です。そこで考えられるのが、今からでも移行可能な生活様式のみ移行させ、有事到来時もその部分は変わらないようにするという発想です。そして現状、世界中が試みている「移行可能な生活様式」が、物理的移動の節約です。既に物理的移動の節約（＝オンライン化）によって、感染リスク抑制や移動コストの削減といった効果が見られており、今後の社会でも様々な変容（会社では本社機能のシェイプアップ、個人では在宅時間増加による住環境の改善）が予想されます。加えてオンライン化を促進させる多くの技術革新（5G回線の導入、高性能機械翻訳の浸透、量子コンピューティングの実用化など）

が控えており、端的には「オンライン化を進める要素は数あれど、止める要素は少ない」という情勢です。With ウイルス時代はまさに、オンライン対応が不可欠な時代になると考えられます。

3. オンライン/オフライン

オンライン対応を進めるにあたり、オンラインによるコミュニケーションがどのような性質を持っているかを認識することは不可欠です。前提としてオンラインには「オンデマンド（非同期型）」と「ライブ中継（同期型）」の2種類が存在し、対面（オフライン）を合わせると、私達は大別して3種類のコミュニケーション手法を持ち合わせているといえます。この現状にあって、私達はどのようにコミュニケーションを割り振れば良いのでしょうか。過去に通信制の大学を卒業した発表者（安江）の経験則として、オンラインは時間や物理的距離、学習回数といった制限から解放されるメリットがある一方、健康管理やモチベーションの維持はオンラインによる便益が希薄でした。このことから、コミュニケーションにはオンラインが有利である事柄と無理な事柄が混在していることが伺えます。具体的にどのようなコミュニケーションをオンラインに振り分けるべきかを考えると、言語化された情報一般（いわゆる「形式知」）は、オンラインでの伝達が優位であることが考えられます。しかし言語化されていない情報（いわゆる「暗黙知」）やそうした情報を含む思考サイクル、つまり「経験」が目的となるイベントやコミュニケーションは、これまでと変わらずオフラインでのコミュニケーションが重要視されるべきでしょう。ウイルス禍では、「情報」はオンラインでやりとりしつつ、限られたオフラインのリソースは「経験」を伝えるコミュニケーションに投じるべきと考えられます。

4. With ウイルス時代のRIを（勝手に）考える

この知見をRIのクラブレベルでの活動にあてはめると、主に「情報」の共有を第一とする会合やイベント（各種事務連絡、卓話、運営会議、地区の勉強会など）は、今後も恒常的にオンライン対応とすることが可能と考えられます。一方で例会や親睦会、RIと社会の接点の一つである奉仕活動などは、会員の「経験」の共有が主眼であるため、今後もオンラインでの代替は困難であることが伺えます。来たるべきウイルス禍に備え、RIの活動の灯をなるべく弱めないよう、今こそいくつかのイベントのオンラインへの移行が進められるべきではないでしょうか。とはいえ、例えば例会の直前に理事会が開催されているように、オフライン（対面）で集まる機会を利用して設定された会議は、現実的にオンライン化することが困難と考えられます。この場合は、収録・中継態勢の強化による欠席者への配慮がなされることで、オンライン化を果たしたといえるのではないかと思います。一方で親睦という「経験」の共有が目的にある例会は、ウイルス禍においても、感染リスクを下げる対策（少人数化、短時間化）が講じられる前提において、ギリギリまで開催が継続される状況が望ましいと考えます。RIの創始者：ポール・ハリスは「ロータリー精神は親睦と奉仕の調和の中に宿る」との名言を残していますが、今後のRIでは、オンラインとオフラインのベストミックスによって、ウイルス禍にあっても上記理念を実現し続けるための工夫を検討すべきではないでしょうか。